

〔継続事業1〕 児童文化向上のためのフォーラム・研究会・イベント等

1 「叢書 文化の伝承と創造 人はなぜ語るのか」発刊と記念シンポジウムの開催

伝承と創造なくして、生きた文化の存続はありえない。伝承と創造のせめぎ合いの過程で、他の領域で異文化を混淆しながら、相互に影響を受け、与え、そのありようを多彩に変化させていく。そして、子どもの文化を核に据え、生活に根差したあらゆる領域の人間活動を取り上げ、子どもの成長発達に資する論考・実践記録・研究成果・資料・データ・作品などを、子どもの権利を尊重し、幸せを願い、ともに民主主義と平和を守る志のある読者に手渡すことを願って、「叢書 文化の伝承と創造」シリーズを刊行した。

第1巻は、片岡輝所長の「人はなぜ語るのか」をテーマにシンポジウムを行う予定であったが、『子どもの文化 4月号』（2017年）で「文化の伝承を考える」と題し、片岡輝所長と堀田穰氏との対談をまとめ、掲載した。今後につなげていきたいと考えている。

2 「戦後の紙芝居」展の開催と「平和紙芝居プロジェクト」

2016年度の「戦争と紙芝居」展の成功を受けて、では、戦後の紙芝居はどうであったかを改めて検証した。昭和20年12月に婦人選挙権の啓蒙のため、戦後発行された紙芝居第1号である『赤と青』やGHQの検閲を通った紙芝居、文部省大臣賞、厚生大臣賞受賞作等、戦後すぐから60年代まで、時代を映した貴重で資料性の高い紙芝居38点を展示・解説した。これは、紙芝居資料室の所蔵作品を広く知らしめ、理解を深めるための企画であった。

同時に、8月27日(土)、28日(日)に貴重な紙芝居の実演を行った。

- ・8月27日(土) 『ボクちゃんの卵』『鐘の鳴る丘』
- ・8月28日(日) 『健ちゃんの腕時計』『こねこのちろちゃん』『おつきさまおんがくかい』

2015年「戦争と紙芝居展」、2016年「戦後の紙芝居展」を行い、紙芝居の持つ、教化力の大きさを実感し、立憲主義の危機に際して、二度と戦争への道に利用されることのないよう「戦争を拒む」というメッセージを多くの人に訴えようと始めた「平和紙芝居プロジェクト」に繋げていった。

現所長片岡輝『小さなお庭』、二代目所長金澤嘉市『一枚の卒業証書』を中心に平和の尊さと戦争の悲惨さをアピールしていく作品を多くの方に演じてもらえるような運動を展開していった。現在は、伸び悩んでいるが、活動は続けていく。

「平和紙芝居プロジェクト」活動の一環として、映画『千羽鶴』（1958年 木村荘十二監督）を上映と同時に紙芝居『原爆の子 さだ子の願い』（1994年 汐文社）を復刻して、プロジェクトの作品の一本となった。

3 堀尾青史・生誕100年記念事業の継続

「堀尾青史の世界から紙芝居の明日へ」展の活動は、引き続き2017年度も次の二箇所で行われた。また、日本経済新聞社から堀尾青史の記事が掲載された。（9月15日朝刊）

- ・4月20～26日 新潟市中央図書館
- ・10月21～24日 神奈川県相模女子大学（鈴木紀子の母校。鈴木紀子についても語られる）

4 分野別研究会

① 紙芝居研究会

児童文化財としての紙芝居の新しい作品創造と作家の養成を目的に、月1回（第1木曜日）開催。各自が創作した紙芝居を演じ、合評・検討を行い、推敲を重ね、作品を制作する。会員は、子どもの文化研究所所員である紙芝居専門家（作家・画家・研究者）10名前後。

② 紙芝居を考える会

紙芝居運動、紙芝居研究を活動の柱に、所員の紙芝居関係者（研究者3名 ひょうしぎ3名 資料室関係者2名 紙芝居研究者2名を中心に）によって構成され、紙芝居イベントの等の中心的な役割を果たしてきた。今年度は「戦後の紙芝居展」の実施とともに、右手賞の選考を行なった。幅広く実演

者に目を向け、推薦アンケートの実務を担い、選考会に関して、今年度の受賞者を決定した。順次作品論を行うこともしていきたい。

【継続事業2】 教育文化に関する研究調査や資料の保管

1 紙芝居資料室関連事業

主に下記の事業を行った。

- ・「戦後の紙芝居」展の企画・展示事業
- ・紙芝居資料室所蔵の全3000点（1938年～）の紙芝居リストの作成
- ・博物館や資料館等で紙芝居関連の展示会等への協力（立版古を購入）
- ・資料性の高い紙芝居・資料の購入
- ・右手賞や堀尾賞の選考、調査、資料等の協力
- ・紙芝居実演者や研究者の資料閲覧と貸与

2 右手賞・五山賞の選考

従来の紙芝居文化の継承とルネッサンスを願って「五山賞」の他に、紙芝居の質的向上と作家・画家・編集者の育成、また紙芝居の実演と研究に広げ、「右手賞」と「堀尾賞」の二賞を設けた。今年度は、五山賞と右手賞を決定した。また、堀尾賞は隔年となった。

- ・第54回高橋五山賞 キムファン・作 福田岩緒・絵 『カヤネズミのおかあさん』（童心社）
- ・第2回右手悟浄・和子賞 野間成之 芸術的話芸で魅了する実演に対して
- ・第2回右手悟浄・和子賞（団体賞）紙芝居文化推進協議会の活動

贈呈式とお祝いの会は、7月17日に、東京・目白「ホテル・メッツ」にて行われた。参加者は68名。『子どもの文化11月号』にて、その詳細を受賞者の声を中心に掲載した。

【継続事業3】 雑誌・図書 の刊行

1 月刊「子どもの文化」の発行

子どもの文化研究所は、各時代の子どもの関わる問題等を有識者と一緒に論じてきた成果を月刊「子どもの文化」を発行するという形で世に問うています。様々な視点から論考を進めた。具体的には、以下の特集を組んだ。

読者拡大は、子どもの文化学校受講生やイベント等でちらしなどでPRしているが、なかなか読者増には結び付かない。しかし、2016年4月号、10月号、2017年3月号は完売。特集により完売も出ているので、内容等の充実を目指していきたい。

1月号	若者からのエアメール	7+8月号	ITと子どもの未来
2月号	レンズと子ども	9月号	見えないものを見る
3月号	紙芝居の底力	10月号	多様性の中で
4月号	自己肯定感をめぐって	11月号	教育の中立性
5月号	図書館へ行こう	12月号	子どもの幸せ

2 「研究誌」第18号の刊行

子どもが育つことと文化の関わりを追求する新たな子どもの文化研究の拠点として、研究者の研究成果を広く世に問う「研究誌」を刊行している。99年に子どもの文化研究所創立30周年を記念して創刊し、以来10年間、「児童文化」研究とは何かを根底にすえて「児童文化研究」の理論の確立と、領域を超えた研究を目指し、具体的なテーマを掲げて探求してきた。研究誌は、研究部門の事業の柱の一つとして位置づけている。本誌読者が、必ず研究誌の読者ではなく、希望者のみなのである。そのため、本誌と連携を図り、読者を増やす企画を行っている。

(18号企画内容)「生きる力」と子どもの文化

- ・「生きる力」を育む 寺脇研（インタビュー）
- ・「生きる力」と子ども ―子ども調査から― 浜島幸司
- ・生活科の新設と「生きる力」の育成 ―生活科の本質と肯定的な子ども観に立つ「生きる力」の育成― 嶋野道弘

- ・遊びの中で獲得する「生きる力」 無藤隆
- ・生きる力を引き出す ―けやの森の挑戦― 佐藤朝代
- ・「歌津でんぐヤマの学校」の活動と「生きる力の形成― 蛸龍仙人の活動記録を中心に― 加藤理
- ・英国シェトランドの火祭りと「アップリアー」が育む子どもの生きる力 鶴野祐介
- ・生きる力と歌 ―歌が心身に及ぼす影響― 片岡輝
- ・絵本を通して考える「生きる力」 佐々木由美子
- ・古田足日と「子ども文化研究」 ―現在に生きる古田足日― 山田富秋

3 「ファンタジーとアニメーション―古田足日「子どもと文化」の継承と発展―」の出版

本書は、古田先生の子どもの文化論、子どもの育ちについての論考を再評価しながら、その可能性と課題の両面を据え、古田論を越えてこれからの子どもの育ちへの理解とヒントを導き出そうとするものである。また、古田先生の「子どもと文化」の再評価を行い、これからの教育・保育に生かされた論として「子どもと文化」を発展的に継承することで、子どもの育ちを支える子どもと文化を問い直したいという趣旨で、童心社の60周年記念事業として、11月に刊行された。企画と編集を子どもの文化研究所が行った

- ・序「子どもと文化」が問いかけること 加藤理
- ・「子どもと文化」論の歴史的な位置づけ ―藤本浩之輔「子ども文化」論との異同性― 鶴野祐介
- ・文化の内面化と子どもの育ち ―文化の身体化と「生きる力」の獲得― 加藤理
- ・古田足日の原体験論・原風景論 ―社会学的視点からの解読― 山田富秋
- ・子どもの発達とファンタジー ―消えつつある“ファンタジーの世界”― 麻生武
- ・「精神の集中・躍動・美的経験」とアニメーション 増山均
- ・古田足日の文化的人間形成論 ―心の二重性をめぐって― 汐見稔幸
- ・「二つの世界」と子どもの育ち 加藤理
- ・バーチャル化する社会と子ども 湯地宏樹
- ・子どもを取り巻く「環境の再構成」 木下勇
- ・文化の変動を推し進めている力 片岡輝
- ・〈子どもの文化権〉とは何か 増山均

4 「叢書 文化の伝承と創造」の出版

この叢書は、子どもの文化を核に据え、生活に根差したあらゆる領域の人間活動を取り上げ、子どもの成長発達に資する論考・実践記録・研究成果・資料・データ・作品などを、子どもの権利を尊重し、幸せを願い、ともに民主主義と平和を守る志のある読者に手渡すことを願ってアイ企画から刊行された。

また、開かれたメディアとして、読者からの企画提案・執筆者紹介などの情報提供を随時受け付け、文化の伝承と創造への参画の実現を目指した。多くの方から、期待されたが、11月に『人はなぜ語るのか』（片岡輝）の刊行されたが、「叢書」として次巻の刊行を予定していたが、出版不況の折、版元がシリーズ化に二の足を踏み、第二集の取り組みが実らず、次年度へと持ち越された。

- ・第二集 紙芝居の歴史を生きる人―聞き書き「街頭紙芝居」 畑中圭一

[その他事業1] 児童文化の向上と幼児教育者・保育士の現職教育を目的とした研修事業

1 子どもの文化学校

待機児童解消という名目で規制緩和による認証園や民間委託園も増え続ける現状に、保育現場ではどう対応すべきかという悩みや不安がますます広がっている。こうした状況に、子どもの権利や健やかな成長を願うことを基調にして現場の要望に応えられる文化学校の講座内容にし、新しい講師も迎え、今年は21教室とした。

文化学校は第一線で活躍されている講師陣を揃え、現場の要求に応えた講義内容ということで、充実した現職教育の場であるという高い評価をいただいている。現場の期待も大きく、28年度は、受講生も増加し、近隣の専門学校等の教室を借りる講座（2歳児クラスの保育教室・谷口國博の伝説の運動会！）が2教室あった。受講者数も延べ人数が1700名を超えるなど、盛況であった。

・年齢別保育教室	0歳児クラスの保育教室	(池田りな 10回 水曜日)
	1歳児クラスの保育教室	(芦澤清音 10回 月曜日)
	2歳児クラスの保育教室	(今井和子 10回 火曜日)
	3歳児クラスの保育洋室	(佐藤佳代子 10回 木曜日)
	4歳児クラスの保育教室	(師岡 章 10回 金曜日)
	5歳児クラスの保育教室	(島本一男 10回 木曜日)
	(その他の講師) 細田淳子 青木久子 井桁容子 加古明子他	
・専門教室	困難を抱える子どもと保護者と向き合う教室	(橋場・田中 5回 月曜日)
	共に育ち合う保護者支援	(今井和子 3回 火曜日)
	汐見稔幸保育教室	(汐見稔幸 7回 水曜日)
	保育実践を高める教室	(加藤・大豆生田 7回 水曜日)
	最新の科学から赤ちゃん(乳児)の姿と保育実践	(遠藤・井桁 8回 木曜日)
	キーワードで考える保育の今	(佐藤・汐見 10回 金曜日)
	加藤繁美保育教室	(加藤繁美 7回 金曜日)
	内田伸子保育教室	(内田伸子 3回 金曜日)
		(その他の講師) 荒巻重人 大宮勇雄 他
・保育文化実践教室	子どもと絵本の教室	(代田知子他 5回 月曜日)
	子どもと紙芝居の教室	(菊池・吉松 4回 月曜日)
	子どもと楽しむシアター教室	(秋永・尾崎 5回 月曜日)
	おはなしとわらべうた教室(A)	(藤田浩子 10回 火曜日)
	子どもと遊び・製作教室	(大森・森田・わけ 6回 火曜日)
	おはなし人形教室	(河上るみ子 5回 水曜日)
	たにぞうの伝説の運動会!	(谷口国博 A・B各2回 水曜日)

2 子どもの文化セミナー

・京都子どもの文化夏季研修会 7月25日(月) 一日セミナー 京都アスニー

2015年度まで行っていた分科会をなくし、京都セミナーの規模を縮小し、「研修会」と名付け、再出発した。2016年度は、汐見稔幸、加藤繁美という保育界のリーダー的な役割を果たす先生をお呼びし、次世代の保育論の講義を行った。特に汐見先生は、保育指針を解説を行い、好評を博した。

子どもとつくる保育の理論と実際	加藤繁美	120名
幼稚園教育要領と保育所保育指針の改訂とこれからの保育	汐見稔幸	180名

・東京セミナー 8月28日(日) 一日セミナー 草苑教育専門学校・東京教育専門学校

保育の多くの課題を、セミナーを通じて自分の問題として考え、保育力を高める内容のカリキュラムにしたため、非常に参加者も多く、遠方からの参加者も多数いた。約350名が参加した。

1 子どもとつくる保育の理論と実際	加藤繁美	90名
2 厳しい状況の中、教育の原点(0・1・2歳児)保育の質をいかに守り、築くか	今井和子	100名
3 わらべうた、あそびうたで遊ぶ、おはなしを楽しむ	藤田浩子	70名
4 てぶくろ人形のうさぎ、たぬき、ぶたのコロコロ人形	秋永敏子	50名
5 困難を抱える親や子への具体的な対応と支援	橋場 隆	50名

・春のセミナー 平成29年2月5日(日) 草苑教育専門学校・東京教育専門学校

次年度の保育指針改定の方向が見えてきた中、改訂のポイントを視野に入れた子どもの育ちや実践を中心にした内容

としたが、受講者数は伸び悩んだ。

1	対話する主体(子)の発達過程と保育実践	加藤繁美	76名
2	チーム力を生かしながら、保護者との心地よい関係をどう築くか - 0・1・2歳児の体と心の育ちを支えあう -	今井和子	70名
3	わらべうた、手あそび、あそびうたで遊ぶ、おはなしを楽しむ	藤田浩子	53名
4	障がい児保育で今大切にしたいこと - 事例に基づいた対応と支援 -	橋場 隆	27名
5	就学までの子どもの育ちを意識した「豊かな遊び」とは - 子どもたちが平和に生きていくには遊びが欠かせません -	島本一男	33名